

中世東密教学における三劫段解釈

——道範における第三劫段解釈を中心に——

大 鹿 眞 央

『大日經』住心品の所謂「三劫段」は、密教における修行の階梯に関する議論、即ち行位論や斷惑論の基礎とされてきた箇所である。しかし、東密においては、特に第三劫段の解釈をめぐって様々な議論が起こり、古来の難義とされてきた。

平安末期から鎌倉期にかけて高野山で活躍した「高野八傑」の一人に正智院道範（一一七八―一二五二）がいる。道範は、東密の行位論において代表的な教説である「初地即極説」を基軸に据えて論を展開した最初期の学匠でもあった。⁽¹⁾ 小稿では、道範とその師僧の禪林寺靜遍（一一六六―一二二四）が、第三劫段における一道無為心・極無自性心の極果と、秘密莊嚴心の初地との関係を如何に解釈していたか考究する。

まず、道範撰『大日經疏遍明鈔』（以下、『遍明鈔』）卷一八の文章を以下に挙げる。これは『大日經疏』卷二の第三劫段における「余教中菩薩」と「此教諸菩薩」⁽²⁾ という語句の解釈を問うものである。

問。今第三劫能超ノ住心有三種。一道・極無・真言也。此三種同

印度學佛教學研究第六十卷第一号 平成二十三年十二月

名「真言門菩薩」耶。答。今真言門菩薩者、全不呼「一道・極無菩薩、唯真言菩薩也。……疑云、……一道・極無既無「經劫之說」。豈入「余教中」、云「經無數劫」乎。答。……是一「道・極無」、超入「真言門」之前方便心也。未入「真言門」云事分明也。……若約「實証」、一道・極無無「實行」果。安然釈云、天台ハ初住ヨリ即入「真言中台」云。仍初住即有教無人也。即彼別教初地入「円初住」。別初地ハ、無人。……彼安然釈云、円初住ヨリ入「真言」文。故円初住已上、無人。……仍証道前ニハ初住已上ニハ無「円人」故無「經劫人」也。⁽³⁾ 花王義又同之。
……如是異解雖多端、自宗正義、上所云林葉・海流相承、尤是自教教相、規矩也。

前半における質問の要旨を述べれば、第三劫能超は一道・極無・真言の三心とされるが、一道・極無に該当する第三劫段の文章に「經劫」の説は見当たらず、「余教」に一道・極無を当てると「余教中の菩薩は無量阿僧祇劫を経る」という『大日經疏』の釈文と矛盾するため、この二心を「此教」に含むべきか否かと問うている。

これに対して、道範は、割註に「已上禪林義、花王義も又之に同じ」と記すように、禪林寺靜遍並びに華王院覺海

中世東密教学における三劫段解釈（大鹿）

（二二四二）（二二三）の教説を挙げている。道範が静遍の教説に準拠して教主や浄土についての議論を展開したことは、既に先行研究の指摘するところであるが、⁽⁴⁾林葉と海流、つまり静遍と覚海の相承を「自宗の正義」・「自教教相の規矩」と表現するように、この第三劫段の文章においても静遍らの解釈に依拠する様子が窺える。

右の文章で静遍及び覚海は、一道・極無を真言門に超入する前方便として位置づける。そして、もし実証の義に約せば、一道・極無には実行の果は得られないと答えている。なぜなら法華円教の行者は、聖位である初住に昇らんとする刹那に真言行に入るが故に、円教の初住以上は行人無し、つまり「有教無人」となるためである。その結果、一道・極無に実行の果はなく、第三劫能超、即ち浄菩提心に超入する「此教諸菩薩」は、真言行者のみとなると説くのである。

こうした静遍の教説の典拠とも言うべき文章を、静遍口・道範記『弁顕密二教論手鏡鈔』（以下、『手鏡鈔』）巻上に見ることが出来る。

今御諭釈意、從_レ円初住即入_二真言初門_一。故_二住以上有教無人_一。為_レ顯_二此義_一、以_二彼初住分証_一為_二入真言門_一也。彼別教初住（地）⁽⁵⁾入_二円之初住_一。豈別人於_レ円作_二同日之想_一乎。是亦如是。安然云、彼円人初住分証時、即入_二胎藏八葉中台藏_一。文 又三部曼荼⁽⁶⁾大中年中唐決云、或從_二初住入_二真言_一。文

ここでも「有教無人」の概念を用いて、円教より真言門に入る旨を説明している。円教より真言門に入る思想自体は、安然の教説に既に見られるが、⁽⁶⁾天台の教義である「有教無人」の語を用いてそれを表現したのは、静遍独特の解釈であると言えよう。

就中、右の文章で刮目すべきは、「二住以上」を有教無人とする点である。前掲『遍明鈔』の教説では、「初住已上」を有教無人として初住の果を認めないのに対して、『手鏡鈔』では、初住の果を認め、そこから真言の初地に入ると説く。つまり、『手鏡鈔』における「二住以上」の語を、『遍明鈔』では意識的に「初住已上」と換言した可能性がある。これは即ち、静遍口述『手鏡鈔』の教説と、道範撰『遍明鈔』に引用される静遍の教説とでは、たとえ即時に真言行に入るとしても、余教の果を認めるか否かという点に相違がある可能性を示唆しているのである。しかし、このわずかな差異が、道範自身の解釈を付加したものであるか否かを判断することは困難であり、また現存する静遍の著作がわずかに数点を数えるのみという現状を考えるに、ここで即座に結論を下すには慎重な態度を取らざるを得ない。よって、小稿では可能性を提示するに留めたい。

次に『遍明鈔』巻一八の文章を挙げる。これは『大日経疏』巻二の第三劫段における「至到之处、雖_二則無_レ異_一」⁽⁷⁾の文を

解釈したもので、問答の焦点は、「直に神通に乗る人」(真言)と「舟車で跋涉する人」(余教)の「至到の処」が「無異」であるとの記述を如何に解釈すべきかという点にある。

林云、問。所言舟車・神通至到無異者、真言、初地・地上之間^{ニハ}、何処乎。答。真言行者六無畏中、第六一切法平等無畏也。非^ニ初地、証^ニ処^一云。……仍擬宜、六無畏次第^ハ、是顯乘、修行種因海、義門。雖^ニ真言行者行^レ密、心、顯之分位而非^ニ虛空無垢初地淨菩提心^一也。……已上義意、至到無異者、二人俱在^ニ寶藏外^一故云^ニ一^ニ也。真言行者、第六無畏、尚其心住^ニ空性^一故云。此義、約^ニ地前^一六無畏中第六蘇息^ニ處^一。顯密行人、其^ニ蘇息^一、擬儀、是^ニ處^一故云^ニ無異^一也。

冒頭の「林云」とは、靜遍の教説であることを意味する。

ここでは「至到の処」を、初地より下位である第六無畏の分齊とする。つまり、本来ならば、十地の他に行位を認めないはずの真言行者に地前の分齊を認め、余教との一致点を設定したのである。そして、これは「擬宜(擬儀)門」、即ち仮設の教門に約した教説であり、第六無畏の分齊の真言行者が密行を修しても、その心は顯教の分位に過ぎないという。初地即極説を唱える立場では、「至到の処」を真言の初地に該当させては都合が悪いため、擬儀門という条件を設けて、神通乘(真言)の人に地前の分齊を設定したのであろう。

このように、『遍明鈔』における靜遍の教説では、前九種住心が真言の初地と同等の果(法華円教であれば初住)に至ることを認めない。ちなみに、同じく平安後期に高野山で活躍

した密嚴院覺鑒(一〇九五―一二四三)は、初地即極説を採用しないため、一道・極無を淨菩提心、即ち真言の初門に該当させて「無異」を説明する⁽⁹⁾。

さて、余教と真言の初地との一致点を地前に設定する思想は、『遍明鈔』卷一八における他の箇所にも窺える。これは『大日經疏』卷二の第三劫段の文中における「真言門に入るために觀想すべき空性」についての問答である。

問。此空性、真言行者不^レ行^レ之歟。答。真言行者^モ地前分位^{ニハ}、同觀^ニ此空性^一也。問。然、行者復以^ニ何法^一入^ニ此門^一耶。……直往^ニ迂廻^一一切、真言行者、以^ニ此空性^一為^レ門、入^ニ真言門^一乎。答。爾也。……今空性者、即天台、一心三觀常寂滅光、理性。是法愛生無記心也。迂廻^ニ人、住^ニ此心^一時、有^ニ驚覺^一、即生^ニ極無自性心^一。此後入^ニ真言門金剛寶藏^一也。直往^ニ頓機^一、宿善純熟^{シテ}可^レ入^ニ真言^一者、即成^ニ空性心^一。空性者、即無始生死、我執流轉、妄執融^ニ性^一也。此心不^レ生者、不^レ入^ニ真言^一故以^ニ攝為^ニ空性^一也。……迂廻者、先於^ニ顯教^一修學^ニ至^ニ相似位^一廻^ニ入^ニ真言^一。直往、不^レ經^ニ顯^一修學、今生^ニ即入^ニ真言^一也。……已上禪林⁽¹¹⁾。

文末に「已上禪林」とあるため、これも靜遍の教説の引用と分かる。ここで注目すべきは、真言行者を迂廻・直往に二分した点、また「一切の真言行者は、空性を門となして真言門に入る」・「真言行者も地前の分位には同じく空性を觀ず」とあるように、空性を觀想する行位、即ち余教との一致点を、真言行者における地前の分位に設定した点である。

詳論すれば、迂廻の行者は、第八・第九の相似位を経て第十住心真言へと入り、直往の行者は、顕教の修学を経ずに今生に真言に入る。つまり、真言行に入る前の第八・第九住心の行者を迂廻の行者と定義することで、地前の分位ながらも、二心を真言行者に含み入れようとするのである。一方で、直往の行者と迂廻の行者における優劣を明示するために、所観の空性を二種に分ける様子も見られる。要するに、この文章においても、真言と余教の一致点は地前に求められるのである。

このように、『遍明鈔』に挙げられる静遍の教説は、真言と余教の一致点が焦点となる文章の解釈において、一貫して余教を三劫六無畏の分齊に留めることに重点が置かれている。

以上をまとめると、道範には、第三劫段における真言と余教の一致点が焦点となる文章において、静遍の教説に準拠する様子が窺える。静遍及び道範は、初地即極説を基軸に据えたことで真言の初地と余教の極果とを同等に扱えなくなったが故に、「有教無人」の概念を応用し、「擬宜（擬儀）門」を仮設し、真言行者を「迂廻・直往」に二分するといった特異な行位論を展開したのである。

- 1 拙論「東密における初地即極説の展開」(『東洋の思想と宗教』二九掲載予定)を参照。

- 2 『大日経疏』卷二(大正三九・六〇三頁中)、『義釈』卷二(統天全、

密教一・六五頁上)。「如余教中菩薩、行於方便対治道、次第漸除心垢、経無量阿僧祇劫、或有得至菩提、或不至者。今此教諸菩薩、則不如是。直以真言乘、超入淨菩提心門。」

- 3 『遍明鈔』卷一八(統真全五・四〇一頁下、四〇三頁上)。

4 中村本然「道範の浄土観」(『高野山大学論叢』二九)、同著「道範記『初心頓覚鈔』について」(『密教と諸文化の交流』)等を参照。

- 5 『手鏡鈔』卷上(統真全一八・二九七頁上)。

- 6 『菩提心義抄』卷二(大正七五・四九一頁上)等を参照。

7 『大日経疏』卷二(大正三九・六〇三頁中)、『義釈』卷二(統天全、密教一・六五頁下)。「譬如有人以舟車跋涉、経險難惡道、得達五百由旬。更有一人直乘神通飛空而度。其所經過及至到之處、雖則無異、而所乘法有殊。」

- 8 『遍明鈔』卷一八(統真全五・四〇四頁上、四〇五頁上)。

9 『打聞集』(興全上・四七五頁)「大日経疏、所謂無異者、一道・極無秘密莊嚴三人、同至第八分位、入淨菩提心位故無異。(中略)此一道無為分位、自然十住心分位歷時、至第八住心、至菩提心初故無異也。」

10 『大日経疏』卷二(大正三九・六〇四頁上)、『義釈』卷二(統天全、密教一・六六頁下)。「已歎入真言門功德竟。然行者復以何法入此門耶。故経次云所謂空性。」

- 11 『遍明鈔』卷一八(統真全五・四〇九頁上、四一〇頁上)。

〈キーワード〉 道範、静遍、『大日経』、『大日経疏』、『大日経疏遍明鈔』、三劫段、有教無人

(早稲田大学大学院)